

17, 18世紀イギリスの社会変革と芸術

—ヘンデル・オペラの受容をめぐる—

村原（田中）京子

(2002年10月11日 受理)

Social Revolution and Arts in England in the 17 th and 18th Centuries

— in the context of Handel's operas —

TANAKA-MURAHARA Kyoko

要約

18世紀初頭、ヨーロッパを制覇した商業都市ロンドンで、G. F. ヘンデルのイタリア・オペラが受け入れられ高く評価されたが、その文化土壌を探るために、先ず17世紀初頭に至るイギリス演劇（とりわけシェークスピア劇）と音楽の歴史を辿った。次に17世紀イギリスの社会変革（ピューリタン革命、王政復古、名誉革命）の中で、芸術文化が如何に崩壊、再興を繰り返していったかを考察、その上にヘンデル・オペラの受容を位置づけた。特に当時の新聞等の記録を Otto Erich Deutsch の〈Handel A Documentary Biography〉(1955) から抽出考察した。また、当時のイギリス王室との関係、及びヘンデルがオペラ劇場経営の上で遭遇した様々な出来事（オペラをめぐるトーリー党とホイッグ党の争い、歌手の争い、敵対する劇場との争い等）、社会的軋轢、オペラ界内部の軋轢に焦点をあて、ヘンデル・オペラの側面を求めたものである。

キーワード：シェークスピア、ヘンデル、ピューリタン革命、王政復古、名誉革命

§. 序

25歳の若きドイツ青年 G. F. ヘンデルがロンドンの地に降り立ったのが1710年末。翌年2月、オペラ〈リナルド〉によってロンドン音楽界にデビュー、以後30年間その地でイタリア・オペラ創作とオペラ劇場の経営に情熱を燃やし、その後〈メサイア〉をはじめとする晩年の英語によるオラトリオによって音楽史上揺るぎない地位を築いたバロックの巨匠ヘンデル。筆者はこれ迄、作品研究（作曲技法研究）を中心にヘンデル研究を進めてきた。個々の作曲技法を当時の美学思想に照らしあわせ、感情表出の場としてのアリアの技法を探求していく中で、社会の要求、聴衆の要求、歌手の要求に振り回されるヘンデルの姿、彼のオペラ上演が当時のイギリス社会との葛藤、妥協・融

合の連続であったという事実、その背景を探る事が研究テーマの一つとして浮かび上がってきた。単にヘンデルが活躍した時代に留まらず、めまぐるしい社会変革の中で外来の〈イタリア・オペラ〉という文化を受け入れたイギリスの文化土壌、音楽環境を遡って考察する事、その上にヘンデルの50余年に及ぶイギリスにおける音楽活動の背景を再考し、位置づける事が本稿のねらいである。

§. 17世紀初頭に至るイギリスの文化土壌

音楽：イギリス音楽の発展過程を遡ると、既に紀元前、バード *bard* と呼ばれる詩人兼音楽家が存在していた事が認められる。更に宗教音楽（キリスト教音楽）の導入も早く、6世紀末にはアウグスティヌス（カンタベリー大司教）によってローマからグレゴリオ聖歌が伝えられた。その後次第にイギリス独自の聖歌（ソールズベリー聖歌）の伝統が確立され、ソールズベリー聖歌は15、16世紀のイギリス・ポリフォニー音楽の音素材として多用されている。教会におけるオルガンの建造も早く、10世紀半ばにはウィンチェスター大聖堂に約400本のパイプを持つオルガンが設置されている。こうした基礎の上に、第1の黄金時代が築かれたのは中世からルネサンスへの転換期、すなわちダンスタブル *J. Dunstable* (c.1390-1453) の時代だった。ヨーロッパ大陸（特にフランスを中心とする）の作曲家達が、1度、4度、5度、8度といった完全協和音程を用いていたのに対し、イギリスの作曲家達は感覚的な響きを重んじ、3度、6度の不完全協和音程を好んで用いている。これらはヨーロッパ大陸の作曲家達にも多大な影響を及ぼした。また、1534年の英国国教会成立に伴い新しい教会音楽の必要が生じた事もイギリス音楽独自の発展を促したと言えよう。第2の黄金時代は1603年に始まるスチュアート朝—ジェームズ1世、チャールズ1世の治世下。弦楽器やその他の器楽アンサンブルが栄えた一方、リュート音楽、ヴァージナルを中心とする鍵盤音楽も大陸の音楽を先行していた。以上の概観の様にイギリス音楽は17世紀初頭まで、音楽文化の先進国フランス、イタリア等と肩を並べ影響しあっていた（ドイツは16世紀、ルターの宗教改革の頃迄音楽の後進国）。しかし、17世紀の社会変革（ピューリタン革命、王政復古、名誉革命）は文化の発展を妨げ、時にその運命を弄ぶ結果となってしまったのである。抑圧によって殆ど空白に近い沈滞期が続いたかと思うと、それを取り戻そうとする隆盛期が到来するといった起伏の激しい世紀だった。

演劇：イギリスといえば〈シェイクスピア劇〉の国、ヘンデルのイタリア・オペラが快く受け入れられた背景に、同じ舞台芸術としての演劇の伝統を無視する事は出来ない。

イギリス演劇の歴史は10世紀に迄遡り、カトリック教会で復活祭やクリスマスに行われた典礼劇に端を発する。聖書の出来事を対話に仕立てて僧侶が唱したもので、他者を演ずるという行為がここに始まったと言えよう。上演の場所は聖堂の中から、次第に回廊、庭へ、やがて町の広場へと移っていき、演ずる人も聖職者から一般の人（俗人）へと変わった。教会から一歩外へ出て太陽の光を浴びるに従い、演劇内容も次第に世俗性を帯びていく。そこで使われる言葉は当初の

ラテン語から日常語（英語）へと変化し、教訓めいたものよりも娯楽性に重点を置いた劇が好まれるようになる。14, 15世紀に盛んだった奇跡劇, 14世紀後半から16世紀半ば迄長く続いた教訓的道德劇, 15世紀後半からは娯楽性に中心を置いた幕間劇, そして16世紀後半には、ウィリアム・シェイクスピア（1564～1616）、ベン・ジョンソン（1572or3～1637）等の活躍による本格的悲劇、喜劇の伝統が築かれた。演ずるのは職業俳優、彼等は王侯貴族の庇護を受け〈劇団〉を結成した。1576年にはイギリス最初の劇場〈シアター座〉が、続いてグローブ座（1599完成）その他多くの劇場が建てられ、演劇は完全に商業化（興業）の一步を辿る事となった。グローブ座は1603年エリザベス女王の死とジェームス1世の即位に伴い〈国王一座 King's Men〉と改称し、シェイクスピア円熟期の新作品を上演し続けた。ロンドンという当時ヨーロッパ最大の都市、年々増え続ける人口、特に知的好奇心旺盛な市民層の増大が劇場の観客動員数に拍車をかけていった。演技と行動、役割と本心、実体と仮象、嘘と真実が多様に響きあうシェイクスピアの世界、演劇という行為によってのみ具現され得る人間の有り様に人々は夢中になった。

シェイクスピア演劇における音楽：シェイクスピアは劇作家としての仕事の中で、音楽に詩やドラマに次ぐ重要な役割を感じていたと思われる。歌や器楽曲は彼の劇作法には不可欠であり、対話の間に挿入される音楽の意味するものは大きかった。宴会、行列、セレナード、決闘、戦い等々その場に応じた舞台音楽、魔術的幻覚を呼び起こさせる魔術音楽、登場人物の性格を表現する性格音楽、更には雰囲気、気分、ムードといった漠然とした空気を表すための補助として、実に見事に音楽を使用している。〈テンペスト〉〈真夏の夜の夢〉〈ウィンザーの陽気な女房たち〉で語られる言葉と共に旋律が頭をよぎる。「シェイクスピアと音楽」、この大きな問題に関する音楽的側面からの探求は次の機会に譲るとするが、イギリス舞台芸術への音楽の定着、ヘンデル・オペラ受容の基盤要因として、シェイクスピアをイギリス音楽史の中に位置付けたい。

（シェイクスピアの死（1616）と共に、彼の劇は一時的にはあるが忘れられてしまった）

§. 17世紀の社会変革に翻弄される音楽・演劇文化

ピューリタン革命：1642年、チャールズ1世のスコットランド失政を契機として、その専制政治に議会（下院）が反抗して起こったピューリタン革命——政治の激変であったばかりでなく、イギリス文化における激変の年でもあった。議会は禁欲的社会の形成を求め同年9月2日、公開の舞台活動の禁止と抑制を命じ、ロンドンの劇場は全て閉鎖された。これ迄培われてきた演劇の制作と上演の継続性と伝統は完全に中断されてしまったのである。演劇ばかりでなく音楽においても、イギリス音楽史上最悪の革命だった。教会では韻律詩編歌以外の音楽は全て廃止され、信じ難い事に殆ど全ての教会でオルガンが除去、破壊されたのである。これぞイギリス音楽史上の最大の失策——イギリスが培ってきたオルガン音楽の伝統は完全に途切れてしまった。宮廷や教会で職を失った多くの音楽家達は思いのままの世俗音楽に埋没し、またある者は職を求めドーヴァー海峡を渡った。世俗音楽領域での僅かの作品を除いて、イギリス文化（音楽）史上信じ難い空白の

20年となった。

王政復古：1660年、フランスに亡命していたチャールズ2世の即位により、ピューリタン革命に終止符が打たれ、イギリスは共和制から君主制へ復活した。チャールズ2世が亡命中にフランス国王ルイ14世と結んだ密約（ドーヴァー密約）、オランダ侵略、ピューリタン弾圧等々政治的悪弊は別として、イギリス芸術は約20年の空白期間から目覚める事となった。先ず王政復古によって演劇界に新体制がもたらされた。早くも1662年にトーマス・キリグラー卿と彼が主宰するキングス劇団に、翌63年にはウィリアム・タヴェナント卿と彼の率いるデュークス劇団に対して、シェイクスピア劇の再演権が与えられた。これはいわば〈特許権の交付〉であり、演劇の独占権が確立され、19世紀中頃劇場条例が可決される迄、この2つの劇団とその後継者達はその権利を継承していったのである。又女優の登場も革命前には無かった新しい現象であり、劇場は屋内に限られ、舞台に袖が付くといった、近代舞台装置が始まった時期でもあった。

フランス亡命中に音楽、演劇、舞踊（バレエ）好きの太陽王ルイ14世と親しく接し、フランス・ヴェルサイユ・バロック芸術の洗礼・感化を受けたチャールズ2世は芸術文化の復興に大きな力を貸した。彼はフランスを範とした王室管弦楽団 The King's Band を設立、瞬く間に宮廷とロンドンはイギリス音楽界の中心となり、演劇と音楽の融合は進んだ。次々に新しい劇場が建設され、そこで演じられるシェイクスピア劇はオペラ風に変化していった。こうして改作〈マクベス〉〈テンペスト〉はその劇の中で音楽が重要な役割を果たす様になったのである。

演劇と音楽の融合——その影響を最も強く受けたのは、後にイギリスの誇る作曲家ヘンリー・パーセル Henry Purcell (1659～1695) だった。次々と上演される演劇文化の中で、パーセルは付随音楽、歌曲や器楽付戯曲、セミオペラといったジャンルに手を染めていった。ドライデンの詩による数々の作品も生まれたが、彼の活動領域はあくまでも幕間音楽、劇中音楽、付帯音楽に留まり、本格的オペラの発展には繋がらなかった。当時既にヨーロッパ大陸ではオペラが流行、人々の関心を集めていた。1660年代のイギリスでも大陸のイタリア・オペラを呼ぼうとする気運はあった様であるが、イギリス国民は始めから終わりまで歌唱で完結する芸術（オペラ）を求めはなかった。それよりもシェイクスピアの再演に夢中な彼等は劇中音楽にイタリア的優美な旋律を求め、そこに満足していた。パーセルや同時代の作曲家による〈劇的オペラ〉への努力は結局オペラの発展には移行しなかったのである。ヨーロッパ各地に様々なオペラが栄え始めると、作曲家達が自作のオペラの題材を求めてシェイクスピアに目を向ける様になったという事が、イギリス文化史上注目すべき事実であろう。

また、王政復古によるイギリス音楽史上もう一つの収穫は、王室一族を音楽で称える習慣が生まれた事と言える。パーセルをはじめ後のヘンデルの時代に数多くの作品を輩出した習慣——王や女王の即位、誕生日、婚礼、葬儀等の特別な行事に際して、頌歌（オード）、アンセム等を作曲し捧げる——はイギリス特有の伝統として定着した。

名誉革命：ウィリアム3世、メアリー2世の即位（1689年2月）——イギリス人をしてその無血革命を誇って **Glorious Revolution** 名誉革命と云わせた革命は、音楽史上たまたまイギリス音楽の沈滞期となってしまった。チャールズ2世による王家の文化支出（王室管弦楽団等々）を快く思わなかったウィリアム3世は、先ず王室音楽及び楽団の縮小化にとりかかった。メアリー女王はといえば、少なくとも音楽家達の保護者であり続けたいと願い、縮小化ながら楽団の存続を守った。これは逆に考えると、ひとつの転換期となったと言えるかもしれない。音楽は、次第に王室から劇場へとその活動の場を変えていったのであるから。主催者も貴族から一般市民へと次第に移行し、芸術享受の場は限られた特権階級の楽しみだけではなく、広く一般大衆のものへと広がったのである。

王政復古とは、決してピューリタン革命以前の旧制度の復活を目論んだものでは無かった筈である。しかし、革命の教訓を忘れた絶対主義復活の結果、それが名誉革命に繋がったと言えよう。社会的政治的には、ピューリタン革命の成果が王政復古の体制を経て名誉革命によって守り抜かれ、更に補強されたと解釈される。演劇、音楽等芸術文化面では、まさに革命に翻弄され、失ったり、再興したりと浮き沈みの激しい時代であった。イギリスではピューリタン革命、名誉革命によって近代社会の基礎が築かれたと云われるが、17世紀から18世紀にかけての時代は、まさに〈近代市民社会成立の時代〉、真の意味で芸術が市民権を得た時代なのである。

1694年メアリー女王が死去、アン王女が女王として王位を継承する（1702年）。アン女王は音楽家達の期待を裏切らず、ウィリアム3世の治世下で停滞ぎみだった王室礼拝堂及び王室音楽家の活動を盛んにし、王政復古時代の音楽勢力が回復し始める。18世紀初頭、王室、市民が共に音楽活動に参加する時代が始まったといえるかもしれない。

§. 18世紀イギリスにおける音楽：G.F. ヘンデルの登場

先に述べたイギリス音楽史上最大の（イギリス人）作曲家ヘンリー・パーセルは、伝統的シェイクスピア演劇において、又独自の劇音楽において、演劇と音楽の融合を実践した。無論音楽家としてのパーセルが、純粋な舞台音楽（オペラ）を求めていた事は彼の作品過程から窺い知る事が出来る。しかし、17世紀後半を生きたパーセル（1659～1695）の時代には、イギリス聴衆は純粋オペラを求めてはいなかった。シェイクスピア劇に興じ、そこに音楽が導入されていく事に満足し、舞台芸術上の音楽の意味、重要性をごく自然に受け入れる迄に、観客・聴衆の目と耳が養われる迄に時間の経過が必要であった。17世紀末頃から、ヨーロッパの巨大な商業都市ロンドンではイタリア人歌手によるコンサートが開かれ始めてはいた。また大陸へ旅行したイギリス人知識階級の人々がかの地でのオペラに刺激され、ロンドンでのイタリア・オペラ公演の機が熟し始めた事もあった。パーセルの死後しばらくの間空白状態にあったイギリスの音楽は、ようやく雪解けを迎えようとしていたのである。1705年ロンドンのドリュアリー・レイン劇場で、パーセルの死後はじめてトマス・クレイトンのオペラ〈アルシノエ〉が上演された。このオペラは、英語のテキストにイタリア

風旋律をつけたものだったとされる。更に翌年、これ又英語に翻訳されたテキストでマルコ・アントニオ・ボノンチーニの〈カミッラ〉が上演されている。これら2曲はまさにイギリス・オペラ最初の試みを示すものであった。

1706年ジョン・ヴァンブル卿がロンドンのヘイマーケットに〈女王劇場〉を創設し、ヴェネツィア駐在大使マンチェスター公爵の協力を得て、イタリアの一流歌手を招き始める。1708年には当代イタリアの名オペラ作曲家アレッシンドロ・スカラッティ(1660~1725)のオペラ〈ピッコとデメトリオ〉(1694)が女王劇場の舞台にかけられた。ここで主役を演じたイタリア人歌手ニコリーニは一大旋風を巻き起こし、ロンドンの人気をさらった。貴族も民衆もイタリア・スター歌手に拍手を送り、はばかり事なくオペラのアリアが原語(イタリア語)で歌われる様になった。

しかし、前述のドリュアリー・レイン劇場における英語によるイギリス・オペラを支持する貴族と女王劇場の純粹イタリア・オペラを支持する貴族は真っ向から反駁していた。

イタリア・オペラは認知されたが、しかし、といったその頃ロンドンに登場したのがG. F. ヘンデルだった。

1710年秋、ヘンデルがロンドンにやって来た丁度その頃、女王劇場ではスカラッティのオペラ〈ピッコとデメトリオ〉が再演中だった。既に1707年から09年にかけてのヘンデルのイタリア旅行中に親交のあったスカラッティは、再演中の自らのオペラの幕間にヘンデル作品のお披露目をかなえてくれた。偶然にもスカラッティのオペラを歌っていたのは、かつてヘンデルのオペラ〈アグリッピーナ〉(1709, ヴェネツィア)でオットーネ役を演じたフランチェスカ・ボスキだった。幕間でこのボスキの歌った〈アグリッピーナ〉中のアリアによって、ヘンデルは女王劇場支配人アーロン・ヒル及びロンドンのオペラ聴衆達の知るところとなった。

オペラ〈リナルド〉

アーロン・ヒルの支持を得て、僅か2週間で書き上げられたオペラ〈リナルド〉は、1711年2月24日、女王劇場で初演され、6月2日シーズン終了まで15回も上演を重ねた。Otto Erich Deutschによる〈Handel A Documentary Biography〉には、外来作曲家ヘンデルへの好意とこのオペラに対するロンドン中の驚異が読みとれる。

先ず2月13日付けの〈Daily Courant〉紙は、ヘイマーケットの女王劇場で初演される新しい予約オペラ〈Binaldo(sic)〉(RinaldoをBinaldoと誤植、勘違い)のテキストが現在プリントされており、劇場のコーヒー・ハウスで予約出来る事、その作曲家はハノーヴァー宮廷のマエストロGeorgio Frederico Hendelというイギリスでは初めて印刷される名前である事を報じている。

更に、22日付の同紙は、ヘイマーケット女王劇場で来る土曜日2月24日、〈Rinaldo〉(此処では正しく記載された)という新しいオペラが上演され、チケットとテキスト・ブックは明日と土曜日にセント・ジェームス・ストリートのホワイト氏のコーヒー・ハウスで引き渡される事が

報じられている。

〈リナルド〉のキャストには当代きってのバス歌手ボスキ、その夫人フランチェスカ・ヴァニーニ・ボスキといった有力な歌手が名を連ねている。ヘンデル自身がハープシコードに座って指揮したと記録されている。2月24日の初演に続いて27日、3月3、6、10、13、17、20、24日、4月11、25日、5月5、9、26日、6月2日と15回再演され続けた〈リナルド〉であったが、紙上は賛否両論を戦わせている。

先の〈Daily Courant〉紙は、その後何回も（3月19日、4月24日、6月5日）〈リナルド〉の再演広告及びオペラ中の全アリア、シンフォニー、器楽曲が出版される事等冷静に、好意的に報じている。

一方〈Spectator〉紙は長い紙面を使って舞台の上で起こった様々な事柄を批判がましく書きまくっている。執筆者の大半はドリュアリー・レイン劇場のイギリス・オペラを支持する人達で、なかでもジョーゼフ・アディソンとリチャード・スティー爾卿なる人物は〈リナルド〉の大がかりな舞台装置を激しく非難している。

アディソンは「オペラというものは、その企画が舞台を楽しくし、怠惰な聴衆を目覚ますためであるならば、装飾が並はずれて華美になってもそれは許されるであろう。しかし舞台やその装置に子供じみた馬鹿げたものを登場させないだけの良識が要求される」として、劇中〈さえずる小鳥よ〉というアリアのところで放たれた雀に非難をぶつけている。さらに続けて、舞台上の雷、稲妻、花火に関して「聴衆はこれらを風邪をひくことなく、火事の心配をする事なく見物出来るかもしれない。何故なら満水の消防車が用意され、事故が起これば直ぐさま活動出来る様になっていたのだから。私は劇場の所有者と親しいので申し上げるが、このオペラが上演される前に建物に保険をかけておくのが賢明であったと思う」と述べている。コメントは非難に満ちているが、舞台の様子を事細かに推測出来、しかも当時のイギリスには〈火災保険〉なるものが存在していたのかと驚かされる。こうした饒舌な非難もヘンデルの音楽には何も触れず、舞台装置やスター歌手に向けられている。当時のイギリス聴衆は音楽そのものよりも、演劇伝統の国ゆえであろうか舞台と舞台上で演ずる人にだけ興味があったのだろうか。数々の非難があったにせよ、〈リナルド〉はイギリスにおける15回の再演ばかりか、アイルランドのダブリン、ドイツ・ハンブルグ、更にイタリア・ナポリでも上演され続けた当代きってのオペラと言える作品であった。〈リナルド〉によってロンドンに受け入れられたヘンデルは1712年〈忠実な羊飼ひ〉初演、翌13年〈テセオ〉初演とオペラの作曲・上演に夢中だった。それは取りも直さず、オペラを上演する劇団・劇場の存在が正当化される過程でもあった。ロンドンのコンサート活動は次第に活発になり、個々独立の企画から定期演奏会シリーズへ、そして予約コンサートへと、公開演奏会形態が長いパンで計画的に企画される時代になっていった。

この頃ヘンデルはオペラ作曲、公演の良き協力者となるオペラ劇場経営者ハイデッカーと親しくなる。ハイデッカーの残したメモによると（1713年中頃）ヘンデルは50ポンド、811ポンド、

そして430ポンドの収入を得ている様である。430ポンド中の73ポンドは5月16日〈テセオ〉上演最終日の幕間に行われたヘンデル自身のチェンバロの余興演奏に対して支払われたと記されている。ハイデッカーのメモによると、オペラを歌った歌手達への支払いが高額（有名歌手には645ポンド、500ポンド、しかし余り知られていない歌手の場合は僅か100ポンド等々）である事に驚かされる。やはり、作曲家、演出家よりも歌手優先の時代である。

ヘンデルと宮廷

アン女王：ヘンデルの名声は当然アン女王の知るところとなり、この頃から彼は王家のための作品を手がける様になっている事実が当時の新聞から窺える。

1713年7月7日付の〈Flying Post〉紙〈The Post Master〉紙（日付はDocument上7月7日となっているが、恐らく1～2日後であろう）

ロンドン、7月7日、女王陛下はこの日、ご自身の宮廷礼拝堂で平和への感謝の祈りを神に捧げられるためセント・パウロ大聖堂へはお出かけにならなかったが格別の喜びを御表明なされた。

即ちその日1713年7月7日は、セント・パウロ大聖堂でヘンデルの〈ユトレヒト・テーデウムとユビラート〉が初演された日なのである。1712年スペイン継承戦争に終止符を打つべく、ユトレヒトで英仏間の平和会談が始まり、3月31日締結、5月5日にロンドンで条約が宣言された。この〈ユトレヒト・テーデウムとユビラート〉を喜んだ女王はヘンデルに200ポンドの年金を賜ったとされる。しかし、この時期ヘンデルはハノーヴァー宮廷楽長の席にあったのだから、女王が国外の宮廷楽長に年金を与えたということは異例の事態だった。翌1714年1月、女王の誕生日のために〈アン女王の誕生日のための頌歌〉を作曲、2月6日ウィンザー宮廷で初演したと記録されている。これまで王室は祝祭行事の際にパーセルの作品を用いていたが、これ以後パーセルとヘンデルの両方を用いる様になった。しかし、同年8月1日アン女王は病のため急逝、アン女王に子供が無かったため、かねて定められていた王位継承確定法に従って、ハノーヴァーの選帝侯ゲオルク・ルードヴィヒがイギリス国王ジョージ1世を宣し、9月18日イギリスへ上陸している。

ジョージ1世：奇しくもこのジョージ1世（ハノーヴァー選帝侯）は、ヘンデルがイギリスに来る前に使えていた君主だった。長い間（およそ2年）ハノーヴァー宮廷楽長としての職務（ヘンデルにとってそれは名ばかりで、退屈な仕事ではあったが）を怠り、ロンドンでオペラ公演に熱中していたヘンデルにとってバツの悪い再会だった。しかし、彼ジョージ1世はそれ程気にしていなかったのか、自分が雇用していた有能な宮廷楽長がロンドンで名を馳せている事に内心密かに喜んでいただけなのか、着任後即日極めて好意的な行動を見せている。

1714年9月28日付〈Post Boy〉紙

去る日曜日（26日）の朝、国王はセント・ジェームスの王室礼拝堂へ出かけられた。そこではヘンデル氏によって作曲された〈テ・デウム〉が演奏された。

その後、ハイマーケット国王劇場（かつての女王劇場）での〈リナルド〉の再演等にも国王は臨席されている。2年に及ぶ職場放棄（ハノーヴァー宮廷楽長）はお咎め無しで、早くも1715年にはかつてのアン女王からの200ポンドの年金に加えて、更に200ポンド増額している。ヘンデルの作品の中でも有名な〈水上の音楽〉は1717年7月17日、ジョージ1世のテムズ河の舟遊びの折に作曲・演奏された楽曲である。これには歴史上様々な憶測が付き、ハノーヴァー以来の気まずい関係が、この一夜の演奏によって修復された等々と書き連ねられている。しかし先に示した様に、既に国王とヘンデルの関係は年金その他のドキュメントが例証している良い関係で進んでいた。

ヘンデルはこの国王の元、イギリス国民になろうと1727年、〈イギリス市民権〉を得ることを決意、同年2月20日に受理され、晴れてイギリス国民となった。ジョージ1世は直ぐさま、ヘンデルに〈王室礼拝堂作曲家〉及び〈宮廷作曲家〉を任命している。この肩書きは正式にイギリス国籍を持つ者にしか与えられない地位だった。しかし、その後間もなく（6月11日）、ハノーヴァーへ旅行中の国王が急死、6月15日ジョージ2世がイギリス国王を宣言した。

ジョージ2世：ジョージ1世逝去の数ヶ月前正式の王室礼拝堂作曲家となっていたヘンデルは、ジョージ2世の戴冠式のための4つの〈戴冠式アンセム〉を作曲するよう命ぜられ、10月11日ウエストミンスター寺院で初演された（そのうちの1曲は、以来イギリスの戴冠式の度に演奏されている〈司祭ザドク〉である）。ジョージ2世も先代国王と同じくヘンデルの良き理解者、後援者で、かつてのアン女王やジョージ1世の与えていた年金を引き継ぎ、さらに王女たちのチェンバロを教えるということで200ポンドの増額を計っている。そしてヘンデルの演奏会初演には、多くの場合臨席されたと記録されている。ジョージ2世の息子ウェールズ王子は公然と父に反抗していた。その原因は、長男でありながら王位継承から外されており、王室や議会に対して反感を持っていたからとされる。父への反感はそのままヘンデルへ向けられ、その音楽を軽蔑し、新しい別のオペラ経営〈貴族オペラ〉（後述）に力を貸し、国王との対立をあらわにした。しかし10年余ヘンデル嫌いの後ウェールズ王子はヘンデルを支持する立場に変わり、〈ウェールズ王子のための結婚アンセム〉（1736年4月27日初演）の依頼となった。それと前後して、ヘンデルは、〈アン女王のための結婚アンセム〉、〈キャロライン王妃のための葬送アンセム〉等々宮廷王族のための教会作品を作曲し続け、ジョージ2世への忠誠を表し、名曲を残している。

オペラ劇場経営：〈王室音楽アカデミー〉

1719年頃から、劇場経営者ハイデッカーとヘンデルは新しいオペラ経営企画に乗り出し、〈王室音楽アカデミー〉を設立することを思い立った。当時イギリスにおける「南海会社」の株価の騰貴に刺激されての妙案で、1口100ポンド500株で出発の株式会社設立と相成ったわけである。1千ポンドを出資したジョージ1世を始め、配当金目当てに集まった貴族達によって、株券は瞬く間に売りさばけていったというから、芸術家にしてしたたかな商才である。

この〈王室音楽アカデミー〉会社に自らの運命をかけたヘンデルはオペラ〈ラダミスト〉の作曲に取りかかる。これはどうしても大成功せねばならぬ作品であり、1720年4月27日満席の国王劇場で初演された。丁度その頃、ロンドンでは奇妙なものが流行し始めていた。カストラート歌手（去勢した男性ソプラノ）の人気、加えてイタリア・オペラの英語版を最初にあみ出したボノンチーニ（前出）が、絶大な人気のカストラート歌手セネシーノを引き連れてロンドンに再上陸したのである。セネシーノの美声がボノンチーニのこぎれいな旋律と共に、ロンドンのオペラ聴衆の人気を奪い始めると、ヘンデルはセネシーノ獲得に躍起になった。その年の暮れ12月28日、ヘンデルの〈ラダミスト〉再演記録によると、タイトルロールはかのセネシーノ、音域の広さで沸かせていたバスのボスキ等々。キャスト替えをしても聴衆に同調していくオペラ経営者としての姿が見える。続く2、3シーズンの間、王室音楽アカデミーはヘンデルとボノンチーニ二人の作曲家のオペラ作品を上演した。その結果聴衆の人気は二分されていった。

オペラをめぐるトーリー党とホイッグ党の争い

二分されるオペラ人気、それは政党の争いに迄発展していった。ある人々はヘンデルの価値を高く評価し、ボノンチーニは聞くに堪えないとし、一方の人々はボノンチーニを称賛し、ヘンデルを非難した。この二人の作曲家を支持するそれぞれのグループは政治党派と迄結びつくようになってしまった。国王ジョージ1世は熱心なヘンデル党であり、ヘンデル派は主として王権派のトーリー党、一方のボノンチーニ派は議会主義を奉ずる不満分子のホイッグ党からなっていた。トーリー党は貴族が中心でその背後に国王とイギリス国教会及び農民がついていた。ホイッグ党は大商人及び新興の金融家やこれに関係する貴族を中心に背後にはピューリタンの中産階級が応援した。

これについて、ヘンデル研究の第一人者であるスタンレイ・セイディー氏がその著〈ヘンデル〉（筆者訳）の中で引用した当時の詩（出典不明）。

ある人は、ボノンチーニに比べれば
ヘンデル氏は馬鹿者以外の何者でもないといい、
またある人は、ボノンチーニなどヘンデルとは
比べものにならないと断言する。

この両者の言い分の相違は何とも奇妙だ。

どちらもどちらで区別が出来ない！

既に貴族社会を真二つに分けた王室音楽アカデミー、このままではアカデミーそれ自体が立ちゆかなくなると考えた支配人達は、ヘンデルとボノンチーニ二人で一つのオペラを作曲させる事とし、1721年4月15日初演のオペラ〈ムツィオ・シェヴォーラ〉となった。第一幕はフィリッポ・アマーディ、第二幕はボノンチーニ、第三幕はヘンデルの作曲となった。今日考えれば無茶苦茶な分担であるが、結局全三幕中ヘンデルの第三幕が最も優れている事だけは認められた。

ところがヘンデルにとって、こうした作曲家の敵対心などは歌手のそれに比べれば何でもなかったという。

歌手の争い

1723年、王室音楽アカデミーの支配人達はイタリアのソプラノ歌手 Francesca Cuzzoni クッツォーニ (1700~1770) を今日のポピュラー歌手が稼ぐ様な馬鹿げた額の俸給で雇い入れた。気難しく、強情で、うぬぼれの強いクッツォーニにヘンデルが怒りの喝を入れた、即ち彼女のために作曲したアリアを歌う事を拒否した時に窓から突き落とすと言って脅したとする戯画はヘンデル伝中あまりにも有名な風刺画である。彼女の余りの傲慢に、支配人達は1726年もう一人の有能なソプラノ歌手 Faustina Bordoni ファウステイーナ (1693~1783) をこれまた巨額な俸給で引き入れた。すぐさまクッツォーニとファウステイーナはそれぞれの支持者を持つ様になり、一方の支持者は他方を良く思わなかった。この二人の歌手の争いにヘンデルは最も頭を悩ましたとされる (Charles Burney: A General History of Music 1776)。その頃の彼の作品を見ると、一つの作品の中で2つのソプラノの役があり、二人に全く同じ重要性を持った役、アリアの数も長さも均等な配分を心がけている事が如実に現れている。例えば1727年1月27日初演の〈アドメート〉においては、情深く、高貴なアルチェステ (ファウステイーナ) と、粗野で無法なアンティゴーナ (クッツォーニ) の二人を巧みに対比させている。オペラの上で女性を描く事に特に長けていたヘンデルが目論んだ実在と舞台上の人物との一体化であろうか。更にこの二人の歌手は、ウェールズ王子臨席の舞台上で度派手な血生臭い戦いまで演じたと報じられている。更に野次馬聴衆はこの喧嘩を野次と叱声でなじったというから想像に余りある。

ヘンデル・オペラ (王室音楽アカデミー破産、新王室音楽アカデミー誕生) 対〈乞食オペラ〉

ヘンデルが王室音楽アカデミーの内紛に悩まされている間に、ロンドンの町はリンカンズ・インフィールド劇場で上演され始めたイタリア人作曲家 John Gay ジョン・ゲイ (1685~1732) による〈乞食オペラ〉の噂で持ちきりだった。歴史上の英雄を扱ったヘンデルのイタリア語オペラとは全く性質を異にし、英語の台本により、獄中における恋の三角関係を面白おかしく描くといった誰もが喜ぶ、何処にでも存在するありふれた筋だった。しかも序曲以外は全くの借り物で、

人々の良く知っている旋律や、聴きやすい歌を集めてきたものだった。ヘンデル・オペラの場面や旋律からの借り物も歴然としていたが、それにもかかわらず多くの聴衆は新鮮で身近な英語オペラに夢中になっていった。上演回数を重ねる〈乞食オペラ〉に対してヘンデル・オペラの王室音楽アカデミーは前出のクッツォーニとファウスティーナに支払った莫大な費用が原因となり、当初の5万ポンドを全て使い果たして破産、劇場は閉鎖（1728年6月1日）されてしまった。

（乞食オペラの詳細に関しては、いずれ別の機会に論じたいと考えている）

ロンドンの人々はヘンデルが傷心の余り立ち上がれなくなってしまったと噂したが、彼自身は破産にめげず、次のオペラ経営を策略していた。早くも秋にはハイデッカーと1万ポンドずつを出し合って新王室音楽アカデミーの設立（再建）に乗り出した。1929年1月27日の〈デイリー・ポスト〉紙は「イタリア音楽の有名なる作曲家ヘンデル氏は、昨日朝、王室音楽アカデミーから任命されイタリアへ旅立った」と報じている。即ち、歌手を求めての旅だった。その年の暮れに新しいオペラシーズンを開幕したが、以前の様な勢いとは程遠かった。

ヘンデル・オペラ〈新王室音楽アカデミー〉対〈貴族オペラ〉

ジョージ2世（前出）の支持を得て船出した新しいオペラ経営〈新王室音楽アカデミー〉ではあったが、これまでのオペラと新作のオペラを繰り返す公演は成功・失敗が交互した。しかもオペラ経営上の良き協力者であったハイデッカーもヘンデルと袂を分かち、ヘンデルは独りオペラの興業を取り仕切る事を余儀なくされた。更に、王家の親子喧嘩の矛先が向けられた如く、ウェールズ王子は新しい組織〈貴族オペラ〉の設立に加担、〈貴族オペラ〉は1733年12月29日ボルボラの〈アリアンナ〉で開幕した。その旗揚げ公演の主演者は、これ又かつてヘンデルが獲得に躍起になったカストラート歌手セネシーノだった。しかも〈王室音楽アカデミー〉時代に借り受けていたハイマーケット国王劇場は〈貴族オペラ〉側に使用され、ヘンデルは新装なったコヴェント・ガーデン劇場での開幕だった。国王ジョージ2世はヘンデルの新しいオペラシーズンに対して国王劇場以来の援助に加えて新たに一千ポンドを賜ったとされる。

当時ロンドンの町で二つの大劇場が同時に公演を張って両方が満席になろう筈もなかったが、半ば空席のコヴェント・ガーデン劇場の貴賓席にはジョージ2世国王が、半ば空席のハイマーケット国王劇場にはウェールズ王子が座っていたという。

ヘンデルはオペラの聴衆を引き寄せるための試行錯誤（バレエの導入、前出の歌手セネシーノの投入等々）を続けたが、イギリスにおけるイタリア・オペラの限界だけが明らかになっていった。やがてヘンデルは英語によるオラトリオの世界（教会ではなく、劇場で演奏するオラトリオ）へと方向を変え始めたのである。〈新王室音楽アカデミー〉及び〈貴族オペラ〉は共に長続きせず、1737年6月、両者とも解散、ロンドンにおけるイタリア・オペラの時代は終焉した。

度重なるオペラ劇場の破産に加えて、卒中の発作を起こして静養に出かけたヘンデルに対して、ロンドンの音楽界は「ヘンデルは2度と立ち上がれない！」と噂したが、西に沈んだ太陽は再び

<メサイア>を掲げて東の空に輝いたのである。

参考文献

- * Burney, Charles : A General History of Music (1776)
 - * Burrows, Donald : Handel (1994)
 - * Dean, Winton & Knap, John Merrill : Handel's Operas ((1987)
 - * Deutsch, Otto Erich : Handel A Documentary Biography (1955)
 - * Hogwood, Christopher : Handel (1984)
 - * Lang, Paul Henry:Gerge Frideric Handel (1977)
 - * Sadie, Stanley : Handel (1968) 邦訳：ヘンデル (村原京子訳) (1975 全音楽譜出版社)
 - * Smith, William G : Concerning Handel (1948)
 - * Streatfeild, R A : Handel (1964)
 - * 渡部恵一郎：ヘンデル (1961 音楽之友社)
 - * 小池 滋：世界の歴史と文化 イギリス (1992 新潮社)
 - * 山川出版社：詳説世界史
 - * 山浦拓道：シェイクスピア音楽序説 (1970 泰文堂)
-
- * The New Grove Dictionary of Music and Musicians (1980)
 - * Neue Handel Ausgabe Georg-Friedrich-Handel-Gesellschaft (1995)
 - * 音楽之友社：西洋音楽史年表 (シェリング編, モーザー補, 皆川達夫訳)
 - * 三省堂：世界史年表